

韓国・李朝の東闕における庭園植栽について
—昌徳宮の外朝および治朝—

白 志星*・藤井英二郎**・仲 隆裕**・浅野二郎***

(*千葉大学大学院自然科学研究科, **環境植栽学研究室, ***千葉大学名誉教授)

A Consideration on the Garden Plantings in the East Royal Palace of
Yi-Dynasty, Korea
—Oheijo and Chijo of Changdok Palace—

Jisoung BAIK*, Eijiro FUJII**

Takahiro NAKA**, Jiro ASANO***

(*Graduate School of Science and Technology, **Laboratory Planting Design, ***Emeritus Professor)

ABSTRACT

This study has a purpose to study the spatial organization and the garden plantings Choson (Yi) Dynasty (A. D. 1392-A. D. 1910) Palaces.

Generally speaking, the spatial arrangement of Palace in Korea had been symmetrically arranged by the influence of palace system of ancient China since Samguk Era.

But, the overall arrangement of Choson Dynasty Palace area asymmetrical depending on the theory of 'Poong Soo' (a kind of geomancy). Choson Dynasty Palaces are classified into four spaces ; 1) Oheijo-the exterior spaces comformed by many offices 2) Chijo-the central and main spaces around Jeongjeon 3) Yenjo-the private living space of king and his family 4) Whowon-the resting and amusement garden spaces. "The map of East Royal Palace (Tongkwuldo)" had drawn in the first stage of 19th century in Choson Dynasty, which had two Palaces of Changdok and Changkweng. The garden planting in 'Oheijo' of Changdok palace area skillfully and colorfully arranged as a brilliant showing space. On the contrary 'Chijo' area has few plant, but the several kinds of ornamental plants comforming a ceremonial spaces.

研究の課題と方法

また現状を併せ考え、李朝の宮苑における植栽について考察する。

李氏朝鮮時代の都は漢城（現在のソウル）であった。この時期、景福宮、昌徳宮、昌慶宮、慶熙宮、徳壽宮などがあった。これらは、それぞれ独立した空間を持ち、そのなかには多くの殿屋が造られていた。

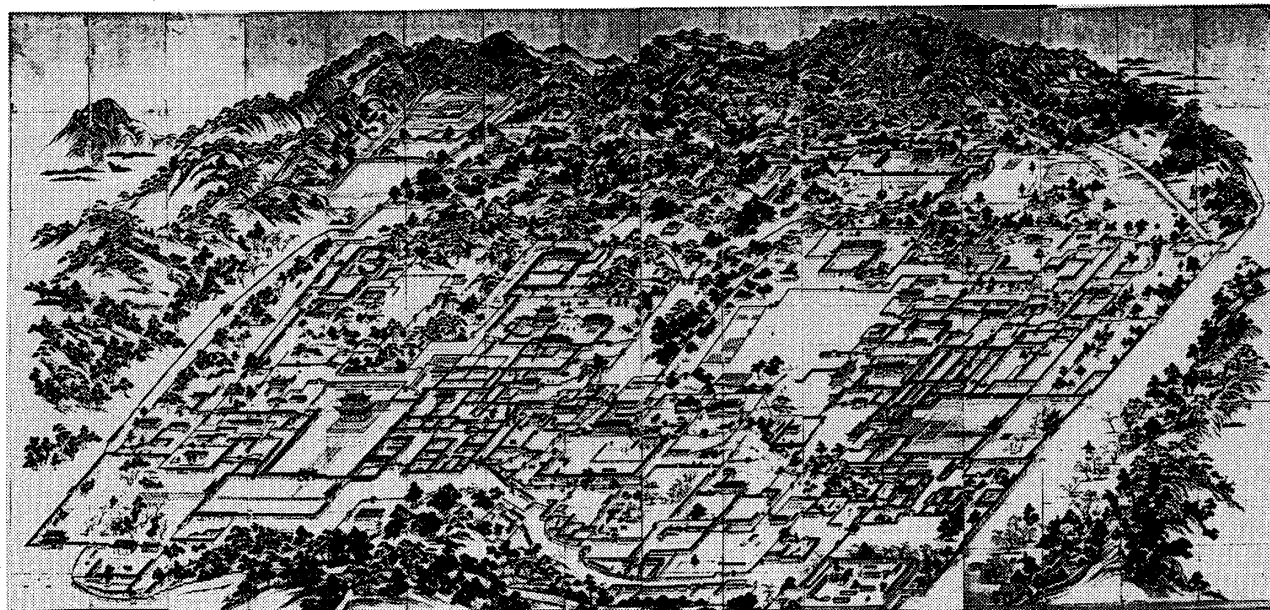
李朝期に造営された大規模な宮殿群に比べると、現存するものはわずかなものにすぎない。幸いに我々が見ることができる現存の殿屋にしても大半は創建されてから戦乱などによる焼失、その後の重修や移建、時には放置による毀損など様々な経過を経て変貌してきたものである。そのことから李朝の宮闕における庭園植栽を検討するためには史料を主とし、現況を参考とする方法を取らねばならない現況にあるといえる。

本研究ではこのような現況を踏まえ、宮闕の様子が詳しく描かれた『東闕図』に着目し、これに重点を置き、合わせて宮闕誌、実記、儀軌、古図等の史料を参考とし、

1. 『東闕図』について

『東闕図』（以後『図』とする）は今から 160 余年前の宮廷を当時の圖畫署の畫員によって極細筆で描いた界面である¹⁾。この『図』には宮闕の様子がかなりの精度を以って詳しく表現されており、建築物と、それを囲う塀、その中の多くの施設をはじめ植物、山、溪谷等の自然を描写している。この『図』は漢城の東闕である昌徳宮と昌慶宮を鳥瞰図の方式で 16 冊の画幅に描いた絹本彩色画である（第 1 図参照）。

この『図』について、李昌教氏は宮闕誌、実記などの史料と『図』に描かれている殿屋の建築年代などの検討から『図』が作られた年代を究明した。その結果、純祖 26 年 (1826) から 30 年の 4 年間に描かれたものとしている²⁾。



第1図 韓国国宝『東闕図』(高麗大学博物館所蔵・縦 273 cm 横 576 cm)

もう一つの史料として『東闕図形』(以後『図形』とする)がある。これは昌徳宮と昌慶宮の配置を平面図の形式で書き上げたものである。『図形』は建物の名称、建物の大きさ、建物の部屋割り、部屋の名称などが具体的に分かるものである。

この『図形』の製作時期は張順鏞によると、1900年から1908年の間に制作されたものとされる³⁾。

本研究では『図』をもとにし、この『図』と『図形』を照らし合わせながら東闕の庭園植栽について検討する。

2. 東闕の構成について

李朝における宮闕の造営は、すでに三国時代に導入していた中国の宮闕制度と風水地理の思想を合わせ用いるかたちを取る。従って、中国の宮闕制度に従うかたちを取りながら、それに加えて地勢をも重視した宮闕の造営が行われたものと見られる。

ここで中国周時代の宮闕制度を見ると、その宮闕における殿屋配置には一種の規範的パターンが存在している。即ち、前朝後寝や五門三朝と呼ばれる制度である。前朝後寝は王の政事を行う所を中心に官庁のある宮内の部分を前朝、そして王と王家の人々の生活の場を後寝として捉えたものである。五門三朝は中国における皇帝の宮殿様式に関わる制度として用いられたものであって、前朝後寝の考え方を発展・展開させたものである。五門三朝については『三才図会』の宮室編にある「朝位寝廟社稷

図」の宮城図に詳しく描かれている。それは天子五門と外朝、治朝、燕朝の三朝及び左祖右社の構成となっている⁴⁾。

このような中国の宮闕制度を踏まえ、それを簡略化したと見られるのが李朝の宮闕における殿屋の配置制度である。しかし、天子は五門を設けるのに対して諸侯は三門であることから、李朝は諸侯の三門をとり三門三朝の構成としたとされる。

韓国には風水地理の思想がある。それは特に都、家、墓などを構える時の択地において非常に重要視された思想であり、宮闕配置にも風水地理の思想が用いられた。例えば『光海君日記』によると李朝光海君7年(1615)7月、明政殿の坐尚と明堂水の御溝のことで意見が対立し、工事が延期されることがあった⁵⁾。この例で見ると宮闕の造営において風水地理の思想がかなり重要視されたことが解る。

宮闕は、すでにふれたように、機能や役割によってその空間は大きく外朝、治朝、燕朝の三つに分かれる。まず外朝は多くの官庁が集まっている所で、王の政事を補佐する役割を持つ。治朝は王が国家レベルの行事をはじめ、朝会、国政の論議、政令の頒布などの政事にたずさわる所である。また燕朝は王、王妃の私的空間であると同時に王家の生活空間となる。

宮闕の後ろには後苑がある。後苑は王家の人々に安らぎを与える逍遙、安息所としての苑囿空間である。

昌徳宮の殿屋において正門の敦化門から正殿の仁政殿に至る空間を見ると、儒教思想による周代の宮闕制度に

従うとの精神が読み取れる。それは周代の儒教思想による南向軸線を守っていることである。しかしながら、地形上、その軸線は仁政門と敦化門の間で西に外すかたちを取り、再び南に向う。即ち、与えられている地形を重視する与件順応の新しい思想が加えられることとなる。つまり、ここでは軸線を移しながらも、あくまで天子南向の原則に従うという努力を見ることができる。

これに対して昌慶宮の場合、正殿は東向きに配置されている。これは先にふれたように風水地理の思想を重視したもので、ここでは天子南向の原則が後退していると言ふべきである。

3. 『東闕図』に見る昌徳宮の宮苑植栽について

(1) 外朝空間における植栽について

1) 敦化門から進善門まで

敦化門は昌徳宮の正門である。『図』を見ると門の外側にはテラス状の土壇が前方に長く延びている。この門の前は王権の象徴である正門をよりきわだって見せるために、広く開いた空間がとられている(第2-1図参照)。

5間3戸重層の敦化門に入ると、門の中央部に対応するようにして設けられた黄土叩きの道(縁は花崗岩の長

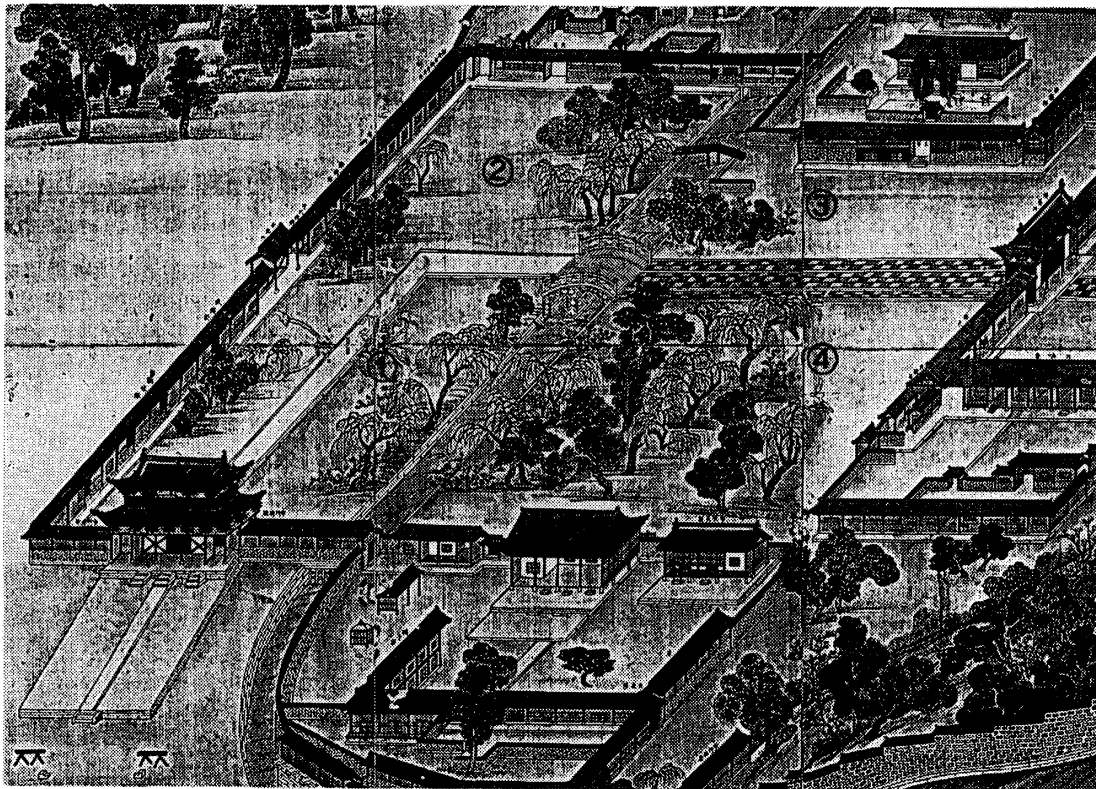
合石で縁取りしている)がまっすぐ延びる。『図形』によれば、この道はやがては金虎門の正面で右に曲がり、錦川橋に達する(第3図参照)。錦川橋を渡ると、そこから進善門に向かう御道が設けられている。

金虎門は仁政門から西におれる御道に対して正面に開けられた門である。この金虎門は風水地理の思想における四神の中、白虎を取り西側を守る象徴としての門と捉えられている。

『図』によれば、黄土叩きの道は錦川橋を境にして橋を東に越えると、磚で舗装された御道に変わる。このことは明堂水である錦川を渡ることによりかなり重要な意味がひそんでいるように思われる。

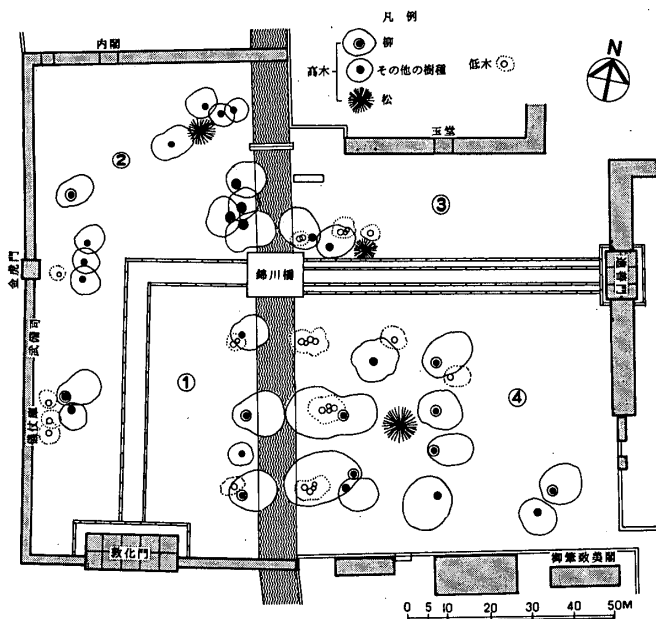
宮闕内の道は、その道を誰が、どのように使うかによって、その舗装と形態に違いが現れる。ここでは錦川橋と御道の構造を見ると中央の部分が、その両側より一段と高くなっていることから、この中央の部分は高貴な人のための道と見てよいだろう。

敦化門から進善門までの空間における植栽は道の両側にとられた広々とした敷地に一見自然風な植栽が行なわれている。『図』にはたくさんの広葉樹、限られた数の針葉樹の高木と花の咲く低木などが描かれている。御溝の流れに沿うようにして列植が見られるが、他はほぼ集団



第2-1図 敦化門から進善門までの外朝空間(東闕図・部分)

(①, ②, ③, ④の数字は本文の項目に対応する)



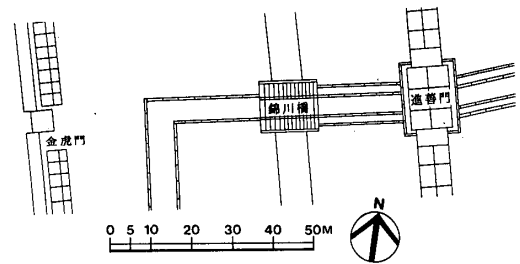
第2-2図 東関図による外朝空間の配植概念図

性を持つ自然風の植栽がなされているように見受けられる。敦化門から入った者にとって、ここは門の外とは一変した樹木に覆われた景観となり、清らかな錦川の流れを横にしながら道を進むと、鬱蒼と繁った樹木の間からは宮舎が目に入る。実際に、この空間において韓国では古くからエンジュ、ケヤキといった象徴性に富んだ植栽がなされた。それは中国の周代に宮内の外朝空間に三本の槐樹があり、三公（太師、太傅、太保）が、その木の下で政事をつかさどったことに由来したもので、そのことから三公の地位を槐位とし、三国時代にすでに宮の別称を槐宸といったのもこのことに関連したものといわれている⁶⁾。槐樹はエンジュとケヤキをいうもので、今日、敦化門の内側で槐樹の巨木を見ることができるのは、これによるものである。このように、王宮という聖なる空間へのアプローチの空間の植栽は、一つの重要な見せ場として、宮を訪ねる者に対して象徴性を自覚できるような植栽樹種の選択がなされているといえる。

この空間における動線を見ると、まず敦化門から金虎門の前を通る黄土叩き道が、直角に曲がって進善門に至る動線がある。次に付属動線として内閣から木の橋を経て玉堂、薬房に至る動線がある。

この空間の地勢は全体的に平坦地で、植栽は特段な盛土をせずになされていて、所によっては群植として処理し、景観の変化を見せている。

この空間は外朝空間の中で最も多彩な植栽がなされた華麗な空間というべき所で、アプローチの空間として重要な意味を持つ。



第3図 金虎門と黄土叩き道の関係図
(東関図形よりトレース・部分・ソウル大学図書館 奎章閣所蔵)

『図』によると、この空間における植栽樹種の構成は高木と低木を合わせて15種類、47本読み取れ、そのうち高木は33本、低木は14本で高木が全体本数の2/3以上を占める。また高木の中で針葉樹は3本、広葉樹は34本で広葉樹が圧倒的に多い。また広葉樹は生態的に見て常緑広葉樹の分布域でないことから、おそらく落葉樹と判断され、四季の変化に富む植栽になっていると言えよう。花木は高木が1本、低木が11本である。

以上をみると、この空間の植栽樹種の構成は広葉の高木を中心に花の咲く低木が加わるかたちとなっている。植栽手法について見ると高木は単木植えよりは集団として植えられたものが多く、低木は何本かの集団の植え方も見られるが、高木に添え植えされたものもある。また樹種の判別は難しいが、柳、松らしい樹木は読み取れる。そして、柳は14本もあり、他の樹種よりはるかに多く見られる。しかも、その柳の半数以上が錦川沿いに列植されていることが注目される。

次に、この空間の植栽について詳しく見ることにする。まずこの空間を錦川で東西に分け、さらにその東部分を御道で南北に分ける。西は黄土叩き道に囲われた東南の一廊とそれ以外の部分とに分ける。西の黄土叩き道に囲われた部分から時計方向に①、②、③、④の区域とする(第2-1、2-2図参照)。

①の区域：この区域の植栽は黄土叩き道から離れ、御溝の方に偏るかたちで列植がなされている。これは道をより広く見せ、正殿に通じるこの道をより鮮明に認識させると同時に、行幸などの行事がこの道で行なわれる時、道の両わきに人々が居並ぶ場所として用いられる空間でもあり、実用的な利用に備える空間として捉えられていると思われる。

この列植はまた、御溝の向こう側にある植栽群を背景としていて、結果的に大きなボリューム感を生み出している。ここで見られる花の咲く低木の添え植は、御溝に沿う高木の列植に対して、変化を与えるかたちで前付

けされた一つのアクセント植栽と見られる。

②の区域：敦化門を入り左側に見る植栽は宮牆にある儀仗庫、武備司の官庁の役割と関連づけて見ることができる。すなわち、儀仗庫は儀式に使われるいろいろな道具を入れておく倉庫で、儀仗庫の前の道は貴人が通る所であることを考えると、この植栽は、ある意味で儀仗庫に対する遮蔽を目的とした植栽と見ることができる。

しかし、武備司は宮を守る軍と係わりを持つ所であり、その前は植栽せず、用の場として開けておく。つまり、前の道を貴人が通る時、列を組んで並び、その貴人に対して礼を整える空間として、金虎門の前の空間と合わせて利用された所と考えられる。金虎門前の一群の植栽は進善門の前面から見る時、御道の東西軸において焦点となる植栽である。

また内閣前にある植栽は、儀仗庫から北側に展開する植栽を一番奥の隅にまとめるかたちをとる。後ろに広がる宮舎の前面植栽として雰囲気や和らげ調和を図るものと思われる。

③の区域：『図』を見ると、御溝に架けられた錦川橋と木の橋の間には、小規模の短い煉瓦の塀がある。これは内閣、玉堂、薬房などの動線に対して、その行動範囲を制限するためのものであり、玉堂の前の空間から御道の方には直接入らないように、行動の範囲を制限する意味を持つものと思われる。この煉瓦の塀の御道側にある一群の植栽は御道から、この塀が見えないようにする遮蔽機能を持つものと思われる。

なお、錦川橋のかたわらに見える一群の植栽については項目を改めて論ずる。

④の区域：ここは一番多く樹木が植えられている所で、一見自然風な植栽がなされている（第2-2図及び第4図参照）。

この植栽は極めてよく計画されていることが『図』から読み取れる。即ち、この区域の配植はこれを囲む殿屋、御道、錦川を基準にして東西南北に軸線を持ってグリットを想定し、このグリットを基礎にして植栽点を求めて

いるように見受けられる。つまり、この配植には一定の方向性を持った秩序のある配植がなされている事が分かる。植栽地の全体的な枠組みを抑えるかたちで、ほぼ中央に錦川と平行して三本の柳が列植される。また、これに平行する形で錦川側に二本の柳が配植され、それらと同間隔で東側に一本の柳が配されている。そして、これら方形的植栽の単調さをカバーするかたちで、それらの間に広葉樹や針葉樹が巧みに配植される。それをさらに細かく見ると、上述の中央三本、錦川沿いの二本の柳の軸線上にあって、致美閣の建物群よりそれぞれ一本ずつ高木が植えられ、さらに東側の柳一本の致美閣寄りにもう一本の高木が植えられ敦化門からの視線を受けとめるかたちをとっている。

一方、花の咲く低木は主役を果たすこれらの高木の添え植えとして配植されるかたちを取り、御道沿いや進善門前の空間に華やかさを添えている。

錦川橋の上から見ると、錦川沿いには花の咲く低木が列を成すかたちで植栽され西側の前面を飾る。この植栽によって清らかな流れと高木の植栽の間に調和する景観を作り出している。同じく錦川橋から御道側を見ると、高木の植栽が御道の南側に深い木立ちの陰を作り出している。そこでは高木の下に下木を配植し、高木の足元の寂しさをおぎなっている。

進善門の前のかかなりの部分が植栽されていないのは、ここが進善門を中心とする実用のための広場であることによる。そして、この空間を強調する意味で、この広場の反対側には深い植栽がなされている。

次に、区域ごとの検討とは別に、錦川橋を中心とした御溝周辺の植栽について取り上げる。錦川橋周りの植栽は橋を中心に大小、強弱、高低といった構成で樹木が配植されている（第5図参照）。

まず、御道北側の植栽は橋により近く植えられていて、やや横張りの樹形で高さをおさえたかたちで植栽し、下枝の低い樹木の間には、さらに花の咲く低木を添え、全体を美しくまとめている。さらに錦川沿いの枝は流れに差しかけられ、優雅な風情さえ生み出している。また、この植栽は御道に接するかたちをとっており、行幸など、この御道を往来する人々に身近なものとして、親しみを感じさせる。

この一連の植栽と錦川を挟んで西に対応する植栽は柳の高木でまとめられている。この柳は対岸の差し枝と流れを挟んで互いに釣り合い、一つの風致を作り出している。

錦川橋の西南袂にはやや控えるかたちで樹木が単木植栽され、そばには低木を添え植えし、安定感をとりながら橋との景色を作り出している。また、御道の南側は橋



第4図 ④区の植栽状況（東闕図・部分）



第5図 錦川橋を中心とした御溝周辺の植栽
(東関図・部分)

からやや離れ、花の咲く低木を植え、華やかな植栽として景趣を引き立てている。

このようにして錦川橋の周りは多様な樹種の添景木をもって立体的に構成され、この空間の重要局面である錦川橋を引き立てるかたちを取る。また、この優れた配植によって錦川橋を装飾すると共に周りに優雅な風致を作り出す役割をも果している。

昌徳宮を訪ねる人が敦化門を入ったとたん目にうつるのは、上で述べてきた各区域に配された深い植え込みと、その中にまっすぐに延びる一本の道であろう。特に道をはさむ両側の植栽は進行方向に沿った植栽によって、深い奥行き感を与える重い植栽となっており、強い印象を与える。

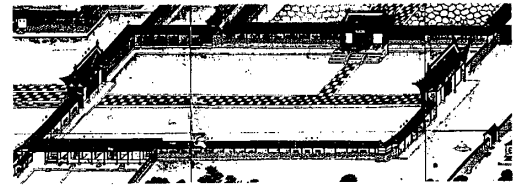
このように宮闕の正門である敦化門の内側には奥行き感を持ったボリューム豊かな植栽群があり、周りの建築物、明堂水の清らかな流れ、錦川橋、御道などの組合せによって、華麗な空間を作り上げ、このことによって深遠な外朝の一つの空間を作り出している。

一方、敦化門の外側は中央に重みのある長い石段と御溝の流れを横に配しながら、広く開けられた単純明快な空間を作り出している。これによって敦化門の内と外では際立って相違した空間構成となり、訪ねる人々に象徴性豊かな宮闕の厳かさを感じさせる効果を生み出している。

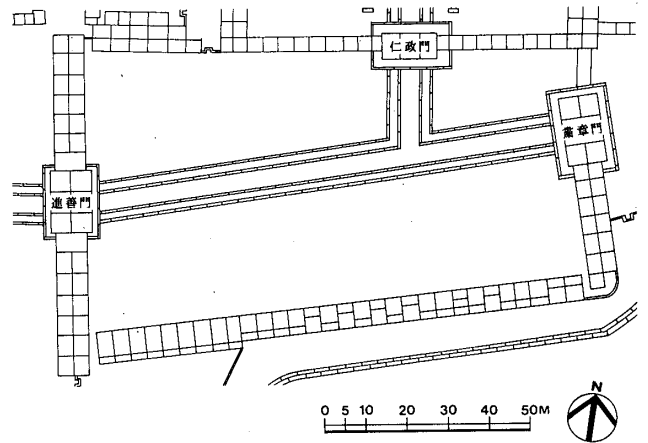
2) 進善門から仁政門まで

正殿である仁政殿の正門・仁政門の前庭空間は尚瑞院、内兵曹、扈衛庁、俳設房、結束色、政色などの官庁のある行閣に囲まれた広い空間である(第6-1図参照)。

この空間のほぼ中央には磚を敷き詰めた御道が進善門



第6-1図 進善門から仁政門までの外朝空間
(東関図・部分)



第6-2図 進善門から仁政門までの外朝空間
(東関図形よりトレース・部分)

から東に延び、仁政門前で矩折し仁政門に達する。また、この御道は直進し肅章門に至る。

但し、この外朝区域の平面形は『図』では長方形の空間となっているが、『図形』では歪んだ長方形をなしている(第6-2図参照)。

御道の構造に関しては『図』と『図形』がそれぞれ異なった構造を見せている。即ち、『図』では御道が一段だけのものとなっており、『図形』では二段構造になっている(第6-1、6-2図参照)。仮に、正殿に向かう御道の中で、この空間だけが一段構造の御道であるとする、この空間における行幸などの行事の様子は、他のものと異なるものと考えられる。

しかし、『図』は一つの絵としての美しさも当然期待されるものであって、この空間の御道の表現を簡潔に描いたものかも知れない。

一方、『図形』では進善門外側の御道と同じく、中央の一段が高く、その両側が低い構造に書かれているが、『図』より『図形』の方が事実に近いかも知れない。

この空間は仁政殿での行事が行われる時、それに関わる空間として利用される所である。それは歴代の王が王位を継承する場合、王は正殿の大門(昌徳宮では仁政門に該当する)の前で即位式を挙行する。そこでは玉爾を受け、正殿に入り、満潮百官の賀礼を受けるといわれ

る⁷⁾。従って、この空間は正殿の空間と共に重要な行事の場として使われることが分かる。

また、「趙大妃四旬稱慶陳賀図」に見られるように正殿の前庭で行われる儀式の場合、並行して副次的なこの空間にも人々が列を組んでいる姿を見ることができる（第7図参照）。

こうした正殿の行事を行うため、この空間での植栽は排除されるかたちをとる。

（2）治朝空間における植栽について

治朝空間は正殿の仁政殿と便殿の宣政殿などで構成されている（第8図参照）。ここでは仁政殿を取り上げ、宣政殿については稿を改めて述べる。

仁政殿は即位式、賀礼式など宮中の行事と外国の使臣の接見の場所で、主に国家的行事を行う所である。

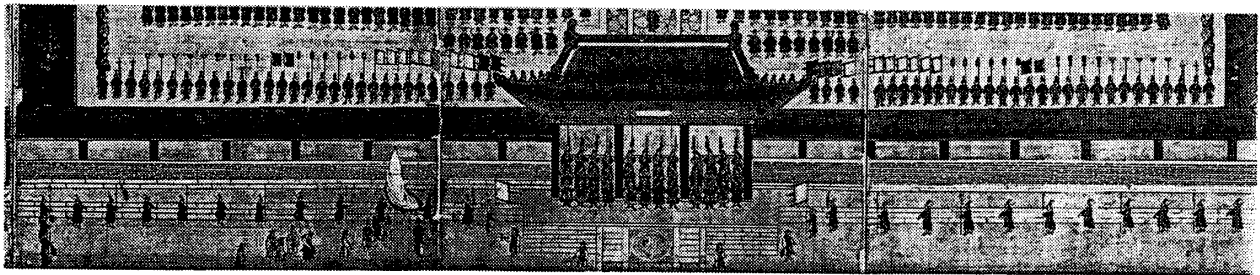
正面五間、側面四間、重層の仁政殿は南向しており、二重の月台を構え、前面には薄石舗装の広い前庭を設けている。月台には御階が設けられ、それは御道とつながり仁政門に延びる。御道の両側には品階石が並んでおり、行事がある時、文武百官がそれぞれの位置に立ち並ぶ。

前庭は東西の月廊と仁政門の左右月廊に囲まれてお

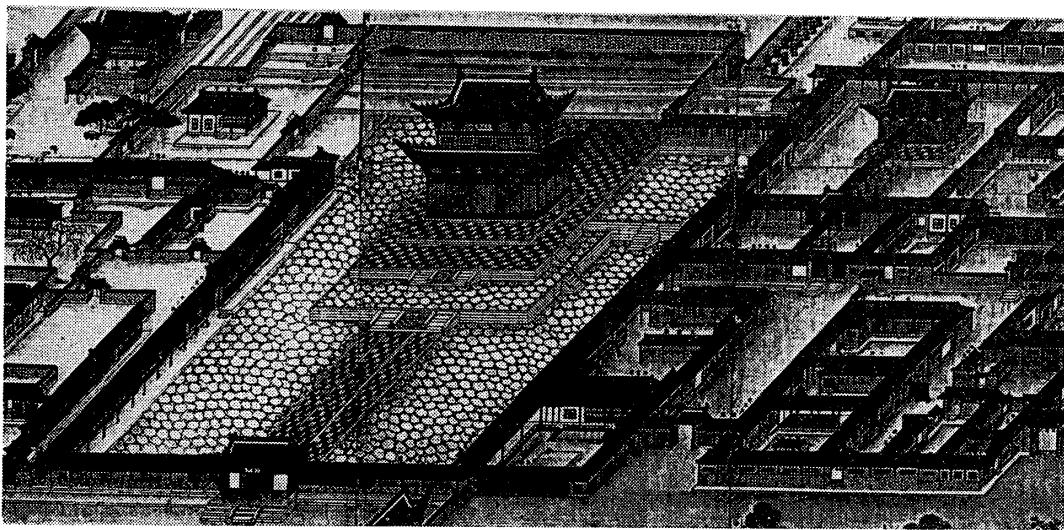
り、各月廊は南に仁政門、東に光範門、西に崇範門を設け、ほかに観光庁、内三庁、楽器庫、書房色、香室などの官庁機関がある。

仁政門から見ると目の前に広い前庭空間が広がる。この庭空間はその全面が石で舗装されている。このことによって、裸地表面に比べて一段と品格の高い庭空間を作り出している。この庭空間の中央を御道がまっすぐ南北に延び月台に至る。月台の上にそびえ立つ仁政殿は、正殿としての品位と威厳を見せる。

仁政殿の北側斜面には花階が設けられ、その背後は煉瓦の塀で仕切られている。花階は五段からなっている。第一段目は仁政殿の後方に続いた月台の上面に長台石を積み、初段を形づくっている。その奥行きは、この花階の中でもっとも広い。花階の四段と五段には草本の植栽が見られる。この花階には、量的には少ないにしても、選りすぐった植栽が求められたであろう。時代は下がるが、「趙大妃四旬稱慶陳賀図」を見ると花階の一部に高木が植栽されている姿が見える。その植栽は行事が行われる月台、つまり舞台の背景を飾る植栽となる。仁政殿での行事において、主な空間は正殿と月台と前庭である。



第7図 「趙大妃四旬稱慶陳賀図」(1847) 部分
(東亜大学博物館所蔵)

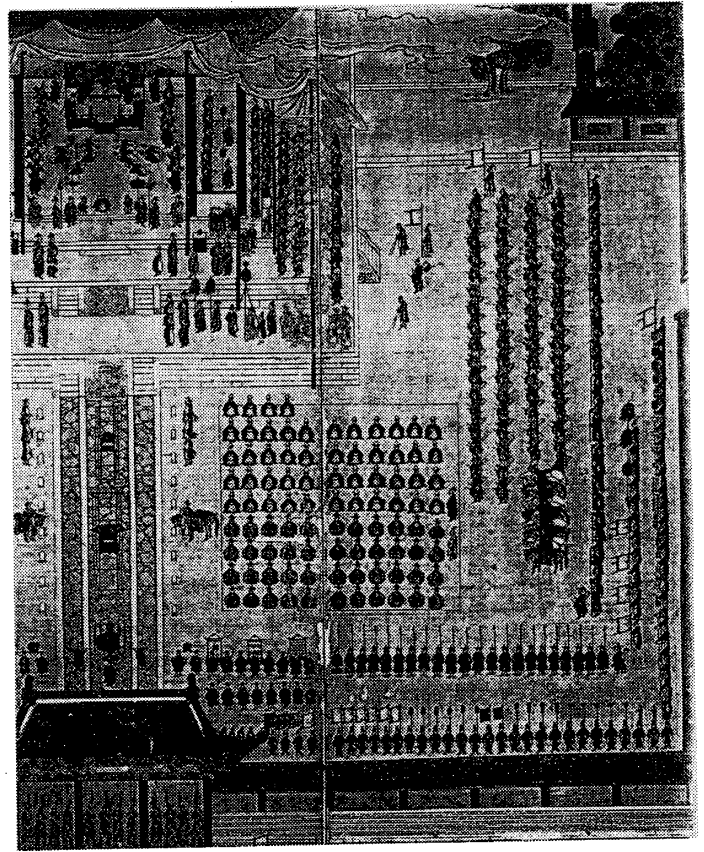


第8図 仁政殿を中心とした治朝空間（東闕図・部分）

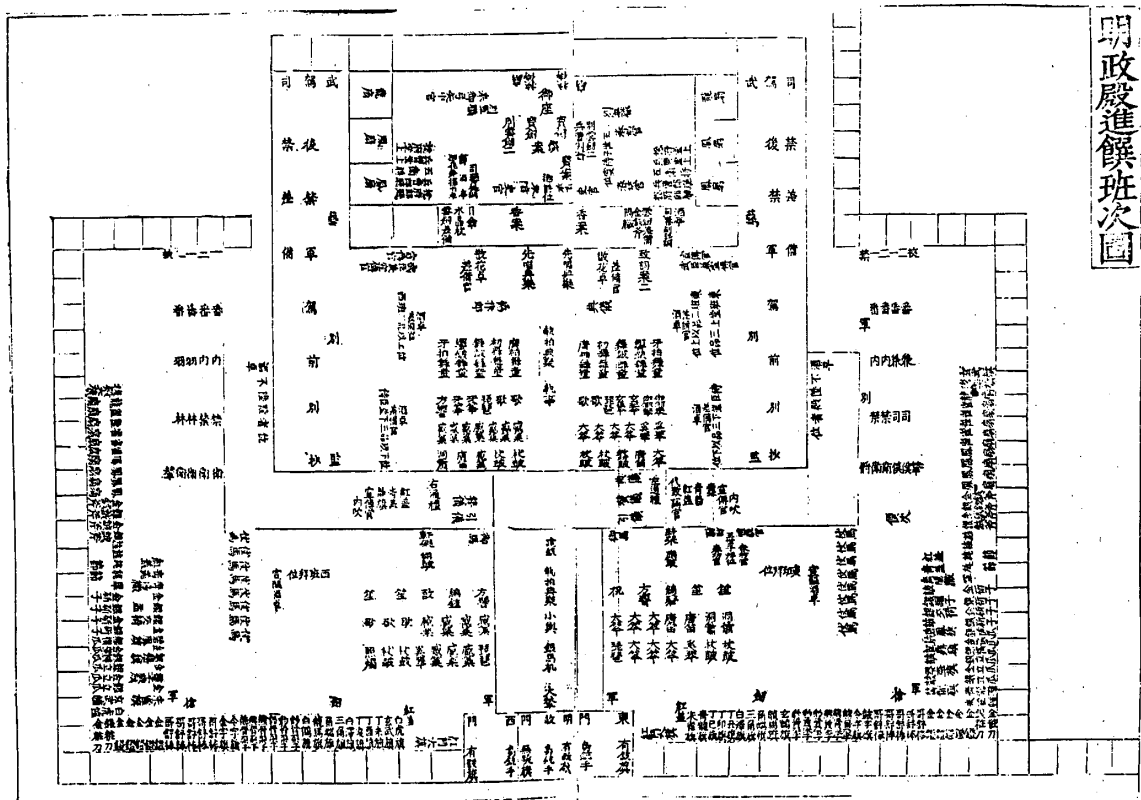
正殿で行われる行事の例として、ここでは「趙大妃四旬稱慶陳賀図」と『進饌儀軌』を挙げて置く。前者は仁政殿における趙大妃の誕生日の賀礼場面が描かれている(第9図参照)。これによると、ここでは月台上に天幕を張り、殿閣内の御座を頂点とし、それに向かうかたちで参列者が前庭空間を埋めつくしている様子が見える。

次に、後者の『進饌儀軌(巳丑)』の「明政殿進饌班次図」と「明政殿進饌図」を見ると、月台の上には臨時の壇が設けられていて天幕を高く張り、御座を中心に参列者が並んでいる様子が分かる。その臨時の壇の舞台では歌、踊りなど余興が披露される。前庭では月台を中心にして、それを囲うかたちで参列者が羅列して儀式を行っている姿が見られる(第10-1、10-2図参照)。これらの図、特に「明政殿進饌図」を見ると、月台は儀式に伴って様々な「舞」が展開される場所である。この場合「舞」が舞われる周辺を飾るようにして散花卓、香案、酒卓、酒亭などが配置されることが分かる。

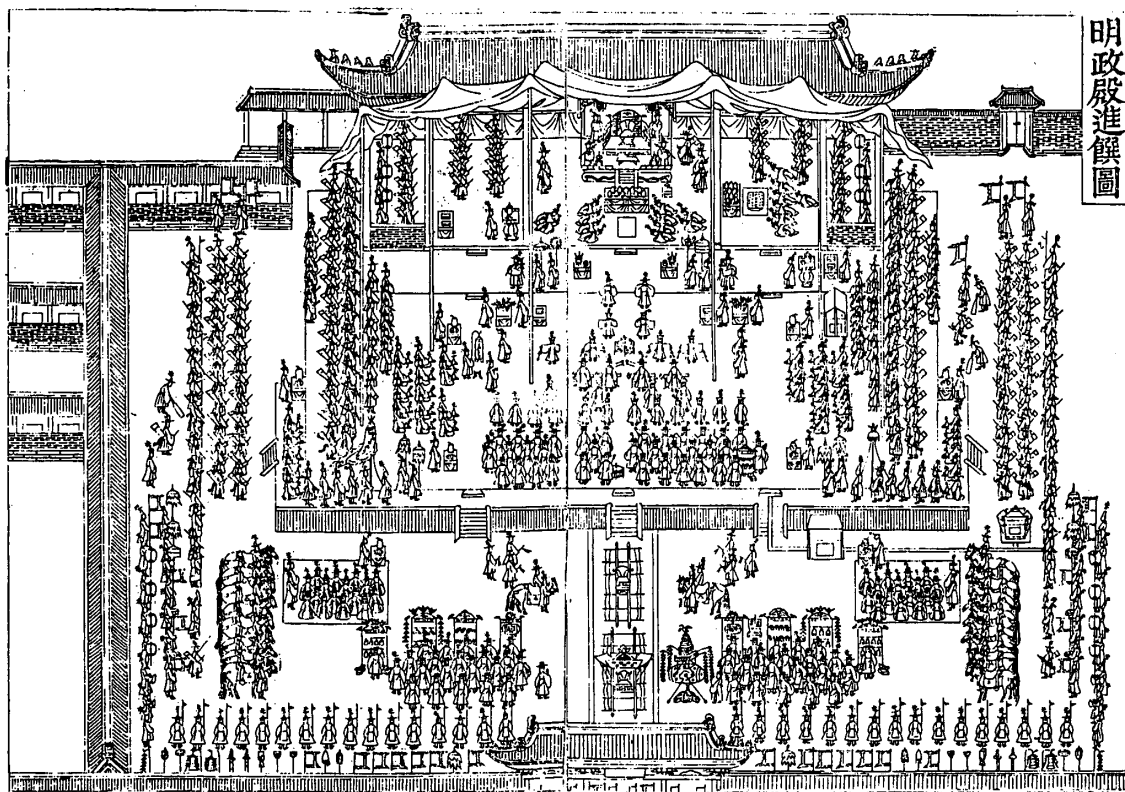
ここで注目したいのは壇上の御座の前面両側に飾られている散花卓である。その散花卓は『進饌儀軌』の「綵花図」で見る紅桃花、月桂花、牧(牡)丹花などの装飾的な花を飾って置く卓と見られる。それはしつらいとしての植栽要素と思われるもので、これによって正殿における儀式の中でも植栽に関する意識が生きていることが



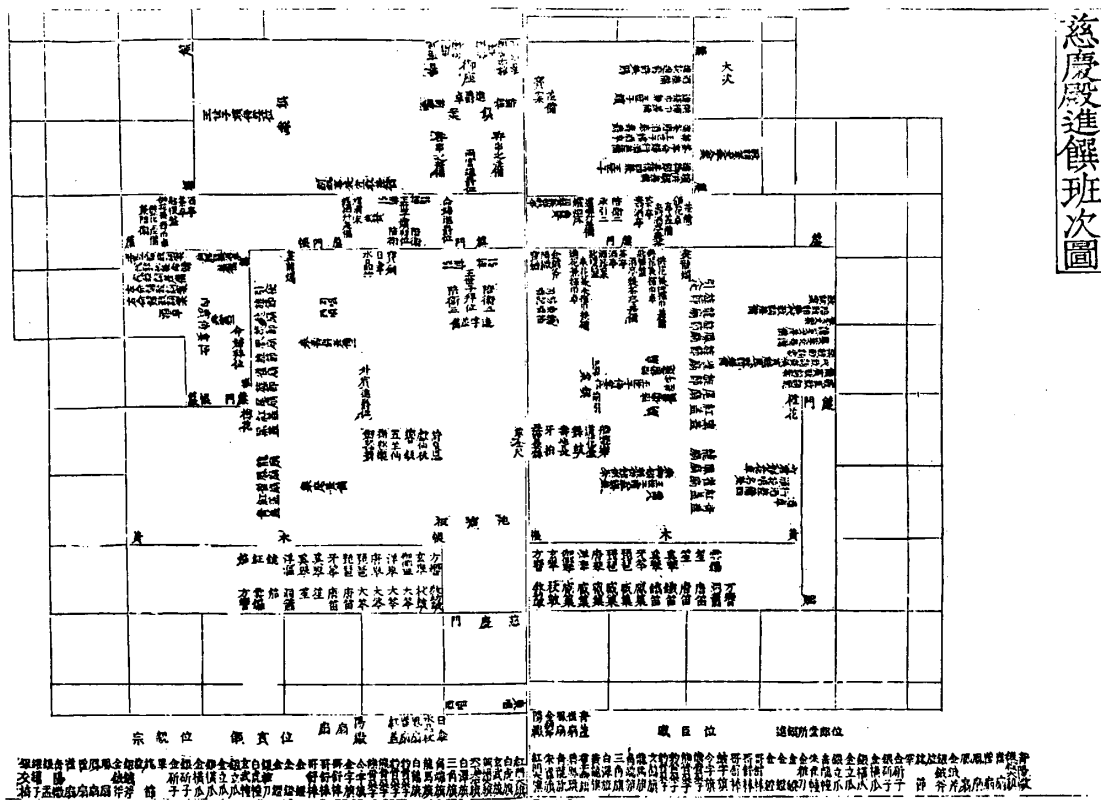
第9図「趙大妃四旬稱慶陳賀図」部分



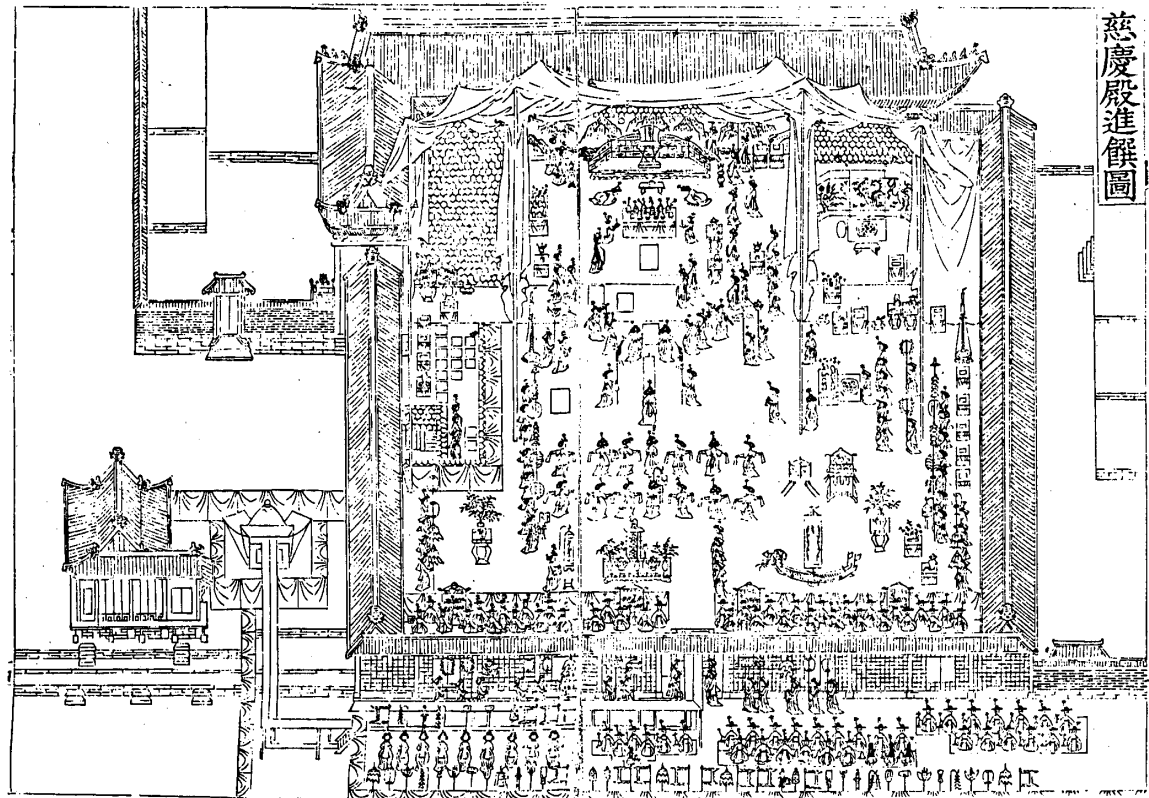
第10-1図「明政殿進饌班次図」(進饌儀軌)



第 10-2 図 「明政殿進饌図」 (進饌儀軌)



第 11-1 図 「慈慶殿進饌班次図」 (進饌儀軌)

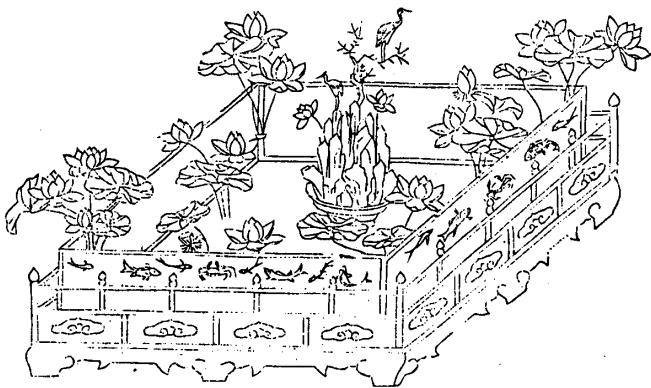


慈慶殿進饌圖

第11-2図 「慈慶殿進饌図」(進饌儀軌)

用板爲之形
如方塘一
尺八分長
尺六分廣
各貯水內
插蓮花葉
着絲彩刻
盤狀付之
中置木假
白鳥棲於
上又設外
長七寸五
加廣比內
淡九寸七
有足設欄
色有彩

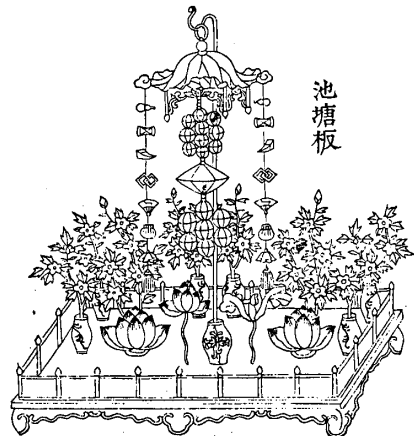
影池



第12図 影池 (進饌儀軌)

制如寢床着彩長五尺二
寸廣四尺二寸足臺高二
寸五分欄干高三寸五分
周挿蓮花及葉又設花瓶
七瓶高九寸五分挿全株
牡丹花前懸竿高六
尺七寸懸七寶燈籠左
設大蓮花筒筒高一尺五
寸

池塘板



第13図 池塘板 (進饌儀軌)

読み取れる。このような意識は燕朝空間における儀式の中ではさらに積極的に、華やかに取り入れられている(第11-1, 11-2 図参照)。

また、慈慶殿の月台の上で行われる「舞」がある。ここで注目すべきは、その「舞」の装飾具としての影池や池塘板である。影池は池をかたどったもので、方塘の中に蓮と假山があり、そこには人造の白鳥が飾られる。また、方塘の外側には多くの魚が描かれている(第12 図参照)。

池塘板は影池と同じく方形をなしており、中には紙で作った全株牡丹の花を挿した七個の花瓶が置かれ、蓮花と蓮の葉が飾られている。中央には七寶燈籠が立っている(第13 図参照)。

これらの装飾具は苑池を象徴的に表している。

このように治朝空間で行われる行事の中では装飾植栽によって行事の場が飾られる。つまり行事の場が植栽を全て排除することではなく、意識のうえでは植栽を迎え入れる要素が含まれるものと見るべきである。

摘 要

李朝における宮闕は中国周代からの宮闕制度に従うか

たちをとりながら、一方では周りの地勢を重視する風水地理の思想が加わったかたちで構成されている。この宮闕に見られる宮苑における植栽は象徴性と装飾性、それから実用性を念頭に置きながら配植されている。

外朝は宮闕のアプローチの空間であり、重要な見せ場として扱われ、ここでは多彩な植栽がなされている。治朝では行事に伴う機能的な面が重視された空間造りがなされ、植栽が排除される。

引用及び参考文献

- [1] 張順鏞 (1990)：昌徳宮，大圓社，ソウル，32.
- [2] 李昌教(1974)：東闕図，「文化財」8号，文化財管理局，ソウル，99-100.
- [3] 張順鏞 前出，34.
- [4] 王圻・王思義 編集(1985)：三才圖會，宮室二卷，上海古籍出版社，上海，1005.
- [5] 文化財管理局(1985)：昌慶宮発掘調査報告書，文化財管理局，ソウル，28.
- [6] 文化財管理局 前出，141.
- [7] 張順鏞 前出，26.